その強盗捕まえるに及ばず

一

「マー君、マー君……」
控えめで、やさしい、耳を撫でるような女の声だった。
男は目を開き、顔をあげ、周囲を見回した。
シーズンオフの別荘地へむかう始発列車は、閑散としていた。老朽化した木造車両は、ホコリっぽく、殺風景だった。車内はまばゆい朝の光に満たされて暖かかったが、窓ガラス一枚へだてた外気は、澄みわたった空の下、見るからに冷え冷えとしていた。森の紅葉も、すっかり終わっている。
男はいちばん隅のシートで、腕を組み、黒い革ジャンパーの襟に顎をうずめていた。車両には、ほかに乗客が二人しかいなかった。
その老夫婦は、横に長い座席の中央にすわっていた。身なりの良い、小柄な夫婦だった。夫は艶のあるソフト帽を頭に乗せ、茶色いチェスターコートに、赤い手編みのマフラーと手袋。妻は、薄紫がかったきれいな白髪にショートパーマをあて、ファーの付いたポンチョをまとい、夫とおそろいの手袋を可愛らしくはめている。ただ、右目につけている眼帯が痛々しかった。
ガラガラに空いているにもかかわらず、二人はつがいの小鳥のように、肩をぴったり寄せ合って座っていた。夫はぶ厚い眼鏡を鼻の下までずらし、週刊誌を読んでいる。夫の腕に手をまわした妻は、不安げに瞳をゆらし、男の方を見ていた。そしてしきりに夫の耳元に何かささやいている。男の目を覚まさせたのは、このささやき声だった。
「あなた、マー君が……マー君が……」
「およし。ご迷惑だよ。あの人は、マー君じゃないんだから」
夫は妻の手をにぎり、やさしく諭すように、たしなめた。
妻はあきらめがつかないといった様子で、男と夫を見比べている。
男は大きなくしゃみをした。ポケットからティッシュを取り出して洟をかみ、ゴミを床に投げ捨てようとしたところで、まだこちらを見ている夫人の視線に気がついた。
同時に、差し込む朝日に反射して、老夫の手首がきらりと輝く。
男は目を細めた。光っているのは、一目で高級品とわかる腕時計だった。
それから、彼が読んでいる週刊誌。表紙から察するに、今日発売の最新号であろう。
男はシートから立ち上がった。直立すると、見上げるほどの長身だった。彼は夫妻の前まで歩きて行き、二人の正面の席にすわりなおした。
老夫は男が抗議に来たと思ったらしく、申し訳なさそうに頭を下げた。
「お休みのところを、すみません。……こら、いい加減なしなさい、失礼じゃないか」
「いえ、いいんです。叱らないであげてください」
男は、にこやかに言った。風邪をひいているせいか、すこし鼻声だった。
「マー君というのはどなたです？　僕がマー君に似ているのかな」
「いえ、そういうわけではありません。マー君というのは、私たちの息子なんです。もう死んでしまったのですが」

老夫は恐縮しながらも、沈んだ声で答えた。彼の横では夫人が、愛おしげに男の顔を見つめながら、マー君、マー君と呼び続けている。

「家内は、まあ、ご覧のような状態でして。息子の死を、受け入れることができないんですね。それで、あなたのような若い人を見ると、つい……」

「まあ、大変。あなた、マー君が顔に怪我を……」

夫人は急にうろたえ出し、夫の袖をひいた。男のこめかみに、絆創膏が貼られているのを発見したのだ。

「ありがとう。だいじょうぶですよ。ただのかすり傷ですから」男は夫人に微笑みを向けてから、老夫に話しかけた。「なんだか不思議な気持ちだな。僕の母も、晩年は認知症だったんです。母の場合は反対に、僕のことがわからなくなってしまったのですが」

「それはお気の毒に……」

「いえいえ、だから、なんだか他人のように思えません。それに僕は名前をマサオというので、マー君と呼ばれても間違ってはいないんですよ」

夫人はパッと顔をかがやかせ、ほら、というように夫を仰ぎ見た。

マー君のおだやかな表情を見て、老夫も、もう妻をたしなめることはしなかった。

「ありがとう。家内のこんな顔を見るのは、本当に久しぶりです」

「別荘でご静養ですか？」

「ええ、大きな仕事が片付いたので、ようやくね。妻のためにも、静かなとこへと思いまして」

「マー君、どうしてそんなところにすわっているの。こっちにいらっしゃい」

夫人はマー君に手招きをし、夫と反対側のシートをポンポンと手でたたいた。

マー君は立ち上がり、夫人の隣にすわりなおした。そして夫人の左手を、掌でつつむように握ってやった。

「マー君、いったい今までどこにいっていたの。もうどこへも行っちゃだめよ」

「わかったよ、おかあさん」

「あら、おかあさんだなんて……」

夫人は、不満そうに口をすぼめた。マー君は頭を掻いて、

「ごめんごめん、ええと、マー君はおかあさんのことを何と呼んでいましたか」

「家内は、ママと呼ばれたがっていました。息子が大人になってからは、そう呼んでもらえなくなっていたので、寂しかったようです」夫は苦笑をもらした。「どうにも子離れできない母親でして」

「そんなことはありません。マー君がうらやましいな。僕もこんなママにもう一度、親孝行できたらな」

ベタベタと媚びるような声で、マー君は言った。そして夫人の手を目の高さにかかげ、まじまじと見つめる。夫人は指輪をはめていた。大きな、エメラルドの指輪だった。

マー君の異様な目の輝きに、老夫は気づかない。

「あなたはどちらへ？　やはり別荘をお持ちですか」

「いや、友人の別荘がありましてね。これからそこへ遊びに行きます」

マー君は革ジャンパーのポケットから鍵を取り出し、チャラチャラと揺らして見せた。

しかし老夫は鍵ではなく、マー君のこめかみに注目した。

「それにしても、その傷は気になりますな。血がにじんでいるし、すこし腫れているようだ。かすり傷ではないでしょう。ちゃんと治療したほうがいい。化膿でもしたら大事だ」
夫は心配そうに顔を曇らせた。「私は、引退する前は医者をやっておりましてね」
「そうなんですか……」マー君は、すばやく頭をめぐらせた。「放っておけば痛みはひくだろうと思っていたんですが、そんなふうに言われると、なんだか心配になってきちゃったな」
「むこうに着いたら、病院にお行きなさい」
「それが、保険証をもってきていないんです。実をいうと持ち合わせもあんまりなくて」
マー君はしょんぼりと眉を下げ、頭を低くして夫人に絆創膏を見せつける。
「ママ、この傷、治療が必要なんだって。どうしよう」
「大丈夫よ。パパに治してもらいなさい。ねえ、あなた」
夫人は夫を振り返った。夫もうなずいて、
「そのお友達の別荘というのは、どちらですか。もしよろしければ、あとで私どものところへ遊びにいらっしゃい。応急処置の道具くらいだったら、別荘に置いてあるから」
「本当ですか！　助かりました。嬉しいな」マー君は大袈裟に感激をしてみせ、いま思いついたというように言葉を継いだ。「そうだ。いっそのこと、直接そちらの別荘にご一緒させてもらおうかな。友達なんか、待たせておけばいい。傷の治療のほうを優先しないと。……ねえ、ママ」
「もちろんよ。当たり前じゃないの。あなた、いいでしょう」
「ああ、かまわないよ」
「ママ、よかった。まだしばらく一緒にいられるよ」
マー君は甘ったるい声で、妻と喜びをわかちあった。
「あなたは優しい方ですね」老夫は、しわがれた声を湿っぽく潤わせた。「家内にいきなりマー君と呼ばれると、みなさん戸惑うか、怒り出します。事情がわかれば哀れんではくださるが、あなたのように、ここまで親切に受け入れてくださった方はいません」
「よしてください。何も特別なことではありません」
「息子を失ったのは、考えてみれば、もう二十年も前のことです。家内は二十年間、その悲しみに耐えてきた。しかし、このように正気を失ってからは、マー君が側に居るという幻覚にすがって生きているようなありさまです」
「お礼を言うのは僕の方です」マー君も、体に似合わぬしんみりした声で言った。「僕は母一人、子一人で育ったのに、親不孝をして、母には亡くなる寸前まで悲しい思いをさせてしまいました。後悔しても、もう取り返しが付かない。お二人とこうしていると、なんだか本当に子供の頃に返ったような、家族をやりなおせているような、あたたかい気持ちになります」
「そう言ってもらえると、私も嬉しい。家族をやりなおす、か……。おい、マー君がもどってくれて、よかったな」
老夫は妻の膝をやさしく撫でさすった。
「何を言っているんですか。マー君ははじめから、わたしたちの息子じゃありませんか」
「そうだよねえ、ママ」
マー君が調子を合わせると、老夫は目を細めながら、「そうか、そうだね。すまんすま

ん」と言って、指先で目尻をぬぐった。
「……ところで、ずいぶん熱心に読まれていますね」
マー君は、老夫の手元をのぞきこんで尋ねた。
「ん、ああ、これですか。べつに熱心に読んでいたわけでもないが。例の事件の記事ですよ。多摩川沿いの、一家惨殺事件。……読みますか？」
夫は男に週刊誌を差し出した。表紙には大きな字で、次のような見出しが躍っていた。
《《速報！　多摩川の医師一家皆殺し　恐怖の犯人像に迫る》》
「ああ、なにかゆうべのニュースで見たような気がするなあ」
マー君は、それほど興味があるわけではないが、といった風を装いながら、雑誌をうけとり、問題の記事に目をこらした。

＊　＊　＊　＊　＊

《《速報！　多摩川の医師一家皆殺し　恐怖の犯人像に迫る》》
十一月一日に発生した多摩川の医師一家殺人事件は、日本全国を震撼させた。夫婦と高校生兄妹の四人が全身をメッタ刺しにされるという残忍さもさることながら、殺害前後の犯人の異常行動が、事件に不可解で異様な印象を与えている。いったい事件当夜、この邸宅では何が起こったのか。

十一月一日、午前六時。多摩川の堤防で犬を散歩させていた近所の主婦が、川沿いに建つ鉄筋二階建ての豪邸に目をとめた。「二階の小さな磨りガラスの窓が真っ赤に染まっていて、血のように見えました。昨夜、こちらのお宅の方から悲鳴のような声が聞こえていたこともあって、怖くなって通報しようか迷っていると、ちょうどむこうから、おまわりさんが来るのが見えたんです」。
知らせを受けた警ら中の巡査は、堤防を下り、邸の玄関チャイムを鳴らしたが、反応がない。門にも玄関ドアにも、鍵がかかっていなかった。声をかけて中に入り、そこで一家四人の惨殺死体を発見する。
この邸宅の主は、大沢孝道氏（四八）。彼は七月に退職するまで、国立病院の外科医であった。また、妻の千鶴さん（五一）は元華族の家柄で、父親は複数の上場企業の役員を務めている。いわば、セレブ中のセレブといっていい一家であった。夫妻には真之介さん（一八）、早由利さん（一七）という兄妹がおり、ともに高校生だった。
この四人の家族全員が、その夜忍び込んだ何者かによって惨殺されたのだ。
彼らの死体は、それぞれ次のような状態で発見された。
【大沢　孝道氏】ダイニングのテーブル横で発見。刃物で喉を切り裂かれ、左胸を二回刺されていた。死亡推定時刻は前日の午後六時から八時。喉の傷は左から右へ切り裂かれており、左胸は上の角度から刺されていた。左上腕と左太股に痣があったが、これはすくなくとも事件より数日前に負った怪我と思われる。抵抗のあともみられず、テーブルには夕食の膳がならんでいたことから、被害者は食事中、椅子にすわっているところを背後から襲われたと推測される。遺体のすぐ脇には、血で汚れたシーツがくしゃくしゃに丸められていた。

【大沢　千鶴さん】キッチンで発見。全身を三十五カ所も刺されていたほか、両手に防御創が多数。エプロンを着用していた。死亡推定時刻は夫に同じ。遺体横に、真っ赤に血を吸ったシーツがひろげられていた。千鶴さんは左手に指輪を二つはめていたというが、遺体の手にそれはなかった。

【大沢　早由利さん】二階トイレで発見。散歩中の主婦が目にした血に染まった窓というのは、このトイレの窓だった。死亡推定時刻は前の二人に同じ。全身を七カ所刺されており、両手には防御創あり。トイレのドアは内側から鍵がかけられていたものの、ドアノブ周辺が破壊され、付近にバールが落ちていた。このことから、早由利さんは犯人に襲われてトイレまで逃げ込んだが、押し破られて殺害されたものとみられる。遺体そばには、血でよごれたカーテンが丸めてあった。このカーテンは、二階おどり場の窓にかけられていたものらしい。また、遺体のそばに、ヨークシャテリアの子犬が首をしめて殺されていた。これは早由利さんが一週間前から飼いはじめた子犬であった。

【大沢　真之介さん】一階の階段下で発見。頭頂部から顔面にかけて火傷。刃物でおもに背中を十カ所刺されていた。彼だけが、真夜中すぎに殺されている。この夜、真之介さんは仲間と終日オートバイを乗り回し、午後十一時頃より、大沢邸に隣接する児童公園で彼らと話し込んでいた。グループは午前０時半すぎに解散し、真之介さんは帰宅。殺されたのは、その直後のことと思われる。遺体周辺および階段のあたりが水をまいたように濡れており、これと真之介さんの火傷とを考えあわせ、警察では、真之介さんは階段をのぼりかけたところ、二階から熱湯をあびせられたのではないかと見ている。そして、もがき苦しんでいるところを刃物で襲われた。遺体そばに、血でよごれたバスタオルが丸めてあった。

《《食事、ビール、風呂……殺人現場での異常行動》》

いずれも血みどろの惨殺死体である。邸内のタンスや引き出しはすべて荒らされ、現金や貴金属は跡形もなくなっていたが、預金通帳とクレジットカードは手つかずだった。

大沢家は二階建ての一軒家で、部屋数は八。二台の高級車と四〇〇ＣＣのオートバイを所有している。高級住宅が建ちならぶ町並みのなかでも、ひときわ豪奢な家の構えである。家は広い通りに面していて、庭木もなく、塀も低い。一見、無防備なようでもあるが、このように外部から丸見えの家は案外、泥棒や空き巣は狙いにくいものらしい。

大沢邸の防犯設備は、どのようなものだったのか。外から見る限り、防犯カメラのたぐいは設置されていないようだった。警備会社のステッカーは貼られているが、事件当夜はアラームもサイレンも反応していない。ドアや窓にも破られた跡はなかったという。つまり、犯人は堂々と玄関から家の中に入り込んだということになる。大沢家の誰かが客として招き入れたのか。あるいは一家は、就寝前には玄関ドアに施錠しない習慣だったのだろうか。

犯人は、土足のまま家の中にあがりこんだ。孝道さん、千鶴さん、早由利さんの三人は、ダイニングで食事中だったらしい。テーブルには、孝道さんの血しぶきが全面に飛び散っていた。キッチンに倒れていた千鶴さんは、家にいる時も化粧を欠かさない習慣だったというが、その顔は涙でぐしゃぐしゃに崩れていたという。全身に無数の刺し傷を負った彼女は、おそらく人生最悪の恐怖の中で死んでいったことだろう。

早由利さんは、一旦は犯人の凶刃をのがれ、トイレに籠城することに成功した。彼女は窓を開け、外に向かって助けを求めたが、あとから述べる理由により、その悲鳴に近隣住民が反応することはなかった。大沢家は町内会の申し合わせにより、防災用資機材整備の一環として、長さ五十センチのバールを所有していた。犯人はそのバールを見つけ出し、トイレのドアを破壊し、早由利さんを殺害した。

真之介さんは、殺害前に熱湯をあびせられている。彼は身長一八〇センチを超える大柄な体格だった。彼と格闘になることを嫌った犯人が、まず熱湯を浴びせて怯ませることを考えたのだとすれば、犯人はすくなくとも真之介さんの体が大きいことを、事前に知っていたことになる。

ところで、宵の口に殺された孝道さんら三人と、真夜中に殺された真之介さんとでは、犯行におよそ五時間の開きがある。その間、犯人は何をしていたのか。

ダイニングテーブルに並んだ料理は食べ散らかされていた。また、ビールの大瓶三本が空になっていたが、殺された四人の体内からはアルコールは検出されていない。浴室は使用された痕跡があり、排水口からは血痕のついた毛髪も発見されている。真之介さん殺害との前後関係はわからないが、犯人が凶行を終えたのち風呂を浴び、一杯やって寛いでいるような光景も想像される。「すぐ横には、血まみれの死体が転がっているんだ。大胆不敵というか、人間離れした冷酷さ、神経の太さを感じる」（捜査関係者）。

犯人が家を出て行ったのは、事件が発覚するほんの数十分前だった可能性もある。

《《大沢家から悲鳴なんか聞こえても取り合わない》》

このように悲惨な事件の被害者となってしまった大沢家であるが、周辺での一家の評判は、実のところすこぶる悪い。もともと近所づきあいの盛んな土地柄ではないが、大沢家はとりわけ地域から孤立していたようだ。

千鶴さんの実家は旧華族・加納伯爵家で、事件現場となった豪邸も、もとは加納家の別邸だったのを改築したものであった。近所の商店主はこう話す。「千鶴さんは名門意識が強く、特定の知人としかおつきあいをしたがらなかったようです。私は息子が真之介君と同級だったのですが、保護者の集まりで顔を合わせても、挨拶もしてもらえませんでした」。

さらに大沢家を孤立させていた理由に、真之介さんの素行の悪さがある。真之介さんは私立高校の三年生だが、ここ一年、まともに通学していなかった。仲間と一日中バイクをのりまわし、何度も警察沙汰を起こしている。また、彼の家庭内暴力といえば、町内で知らない者はいなかった。大きな物音や悲鳴が聞こえることも日常茶飯事だったという。早由利さんがトイレの窓から発した悲鳴が聞き届けられなかった理由もここにある。じつは午後七時ごろ、複数の近隣住民が助けを呼ぶ早由利さんの声を聞いている。しかし、「大沢さんのお宅からどんな悲鳴が聞こえてきても、取り合う住民などいません。警察に通報なんかすれば、かえってあとから、奥様にねじこまれて文句をいわれるんです。あの奥さんは自分たちの身より、世間体のほうが大事だったんです」（同商店主）。孝道さんの体にのこっていた痣は、犯人によるものではなく、真之介さんの暴力によるものだったようだ。

さらに、早由利さんについては驚くべき事実がある。昨年十二月に発生した、世田谷女子高校生が、同級生のイジメを苦にして自殺した事件。本誌でも特集を組んで報じたこの

イジメ事件の記事の中で「S」としていた首謀者の女生徒が、じつは早由利さんだったのだ。

早由利さんは、いわゆる不良生徒ではなかったが、ある意味ではそれ以上にクラスメートから恐れられている存在だった。「校内ではいつも取り巻きをひきつれて、女王気取りでした。それで誰かむしの好かない子がいると、集団で徹底的にイジメるんです。中学のころからそうでした」(早由利さんの同級生)。この事件がきっかけで、孝道さんは国立病院を辞職している。早由利さんも事件発生後、今の高校に転校しているが、あまり反省の色は見られず、新たな取り巻きをつくって性懲りもなく同級生をイジメていたという証言もある。

このように大沢家は問題の多い一家であり、恨みを抱く者も少なくなかったと想像される。犯行の残忍さからも怨恨による犯行という線が濃厚と思いきや、家から金品が奪われている点について、次のような指摘もある。「たっぷり時間をかけて念入りに家捜しし、金目の物はきれいに持ち去っているが、足のつきやすいカードと通帳には手をつけていない。強盗に見せかけるための偽装とも思えない」(捜査関係者)。

四人の遺体のそばに落ちていた血まみれのタオルやカーテンは、何を意味するのか。現場から、指名手配中の強盗の指紋が検出された、との情報もある。

今後、捜査はどのような展開を見せるか。続報を待たれたい。

二

マー君はこらえきれず、大きなくしゃみをした。

「まあまあ……」すかさず妻がポーチからティッシュを取り出し、マー君にわたした。

マー君は礼を言って洟をかむと、雑誌を閉じ、老夫に返した。

「恐ろしい事件ですね」

マー君が言った。

「まったくだね」

「しかし記事を見るかぎり、殺された家族の側も問題があったようですね。殺されても仕方がないような」

「そんなことは言うものではないよ」老夫は分別臭くマー君をたしなめた。「ずいぶん熱心に読んでいたようだが、この記事になにか特別な興味でもあるのかね」

「まさか。そんなわけありません」マー君は、声をいちだん高くして否定した。「それに週刊誌なんて、でたらめばかりだし」

老夫は怪訝そうにマー君を見たが、やがて雑誌をひろげ、他の記事に目を落とした。

電車は何本目かの橋をわたった。川を一本わたるたびに森は深くなり、窓の外の民家が少なくなっていく。

夫人はマー君のたくましい体によりそい、幸福感に満たされながら、何事か呟いていた。マー君が子供の頃の思い出話をしているようだった。マー君は適当に相づちをうって調子を合わせていたが、なにか虫が知らせたのか、急に鋭い視線を四方に走らせた。そして隣の車両に何かを発見し、体を硬直させた。

「……どうしたの？」
夫人が変化を敏感に察し、マー君を見上げた。
「なんでもないよ」
すこし強ばった顔で答えながら、マー君は隣の車両に背を向けた。そのまま息をこらすようにしていると、やがてガタンと音がして、車両の連結扉が開いた。
入ってきたのは、よれよれのコートを着た中年男だった。白髪交じりの無精ヒゲ、髪はぼさぼさで、風采はあがらない。ただ、日に焼けた顔の中央に光る目の鋭さが、ちょっとふつうではなかった。
男は後ろ手にドアを閉め、車両の中を見渡した。そしてマー君の姿をとらえると、頭のてっぺんからつま先までなめ回すように観察した。マー君はますます男に背を向けたが、大きな体は隠しようもない。
マー君のこめかみに絆創膏を認め、男はそれまでの険しい表情を破顔させた。探しまわっていたものをようやく見つけ出したという、会心の笑みだった。
車両の揺れに何度もつんのめりながら、男は三人に近づいていった。そして彼らの正面の席に、尻もちをつくようにして腰をおろした。
マー君はそちらには顔を向けず、夫人に体を密着させ、肩に手をまわす。
男はジロジロと無遠慮にマー君を見つめている。マー君が無視を決め込んでいるのに対して、夫人は男の存在が気になるようだった。マー君は彼女の注意を引き戻そうと、しきりに話しかける。しかし、夫人はどうしても、不躾な男の視線が気になるらしい。
我慢できずに、ついに夫人が言葉を発した。
「マー君、こちらの方、お知り合いなの？」
「いいや、知らない人だよ、ママ」
ママ、という言葉の強調が、いかにも不自然だった。
「だって、さっきからずっとあなたのことを見ているのよ」
「そんなの放っておけばいいよ」
「ああ、いや、失礼しました」この機をとらえて、男は朗らかに話しかけてきた。「あんまり仲がおよろしいので、微笑ましくて、つい見とれておりました。気を悪くされたらすみません」
「あら、いいえ、そのような」
夫人はパッと顔つきを明るくし、たちまち機嫌をなおした。
「こちらはあなたの息子さんですか？」
「ええ、ええ。うちのマー君です。わたしたちの息子なんです」
妻は誇らしげに胸を張る。
男は片眉をひょいと持ち上げて、あらためて三人を見た。人を観察するプロフェッショナルの眼光だった。小柄で裕福な老夫婦と、レスラーのような大男。むろん、本当の親子であるはずがない。妻の表情や話し方。マー君と呼ばれた男のなれなれしい態度。
「なるほど。これは、いいところに居合わせた。危ないところだったな」
男はひくい声で言った。表情は穏やかだが、声音には静かな怒りが秘められている。
そのニュアンスを、マー君だけは聞き分けた。
「危ない？　いったい何が危ないんだ」挑発に乗るまいと思いながらも、反応せずにはい

られない。「ジロジロと人の顔を見て、失礼じゃないか」
「あら、マー君、お友達にむかってそんな乱暴な口をきいてはいけないわ」
「だから、この人は僕の友達じゃないんだよ、ママ」
「まあまあ、落ち着いて。深い意味はないんです」男は首をすくめるように頭を下げ、「朝から不快な思いをさせて、申し訳ありません。ご家族そろって別荘へ行かれるんですね。うらやましいなあ」
「……そういうあんたは？」
「残念ながら、私は仕事なんです。人を探しておりましてね。……そうだ。あなたがたにも、これを見てもらおうかな」
男は懐から折りたたんだ紙を取り出し、ひろげて見せた。
それは警察庁が配布した、全国指名手配のポスターだった。中央に輪郭だけの似顔絵が描かれ、その周囲に赤や黄色の修飾文字が躍ってる。

《《この男は連続強盗殺人事件の犯人です！》》
寺西　陽平（三十一才）、京都府出身。
六月七日、愛知県名古屋市において、クラブ経営者女性を扼殺、現金四十万円を強奪。
九月二十日、大阪市港区において、巡査から拳銃を強奪して射殺。
十月三日、大阪市淀川区において、タクシー運転手を射殺、現金五万円を強奪。
十月二十一日、愛知県犬山市において、タクシー運転手を射殺、現金三千円を強奪。
十月二十四日、神奈川川崎市の飲食店で強盗未遂。店員が二名撃たれて負傷。
身長一八〇センチくらい。痩せ形。右のこめかみにアズキ大のイボ。
黒いパーカー。ジーンズ。赤いスニーカー。
たいへん凶悪な犯人です。心当たりのある方は一一〇番に通報を。

マー君は差し出されたポスターを手にとって、目を細めた。男がこちらの反応をうかがっていることは、気配で感じられる。
「ああ、これなら見たことがあるような気がします」
「気がします？　世間を騒がせている大事件なのに？　……ああ、いや、無理もない。世の中には心ない奴がいますから。ほら、このポスターをよく見てください。しわくちゃでしょう。じつはこれ、先ほど始発駅の屑籠の中で見つけたんです。誰かが待合室の掲示板から剥がして、まるめて捨てたんですね」
「へえ、そいつはひどい」
「そのうえに、洟をかんだ紙くずが捨ててありました。こんなイタズラをする奴がいるから、あなたも同じ駅で電車に乗っていながら、ポスターに気がつかなかったんですね」
男は肩を怒らせ憤慨してみせた。
「でも、この手配書がなんだっていうんです。まさか、あんたが探しているのは、この犯人なの？　あんた警察関係の人？」
「そういうことになりますね」
「本当に？」
刑事は胸ポケットから警察手帳を取り出し、表紙を開いて写真を見せた。

マー君は身を乗り出して、念入りに写真の顔を確認した。
「警視庁の方でしたか」マー君はさすがに辞色をあらためた。「でも、おかしいな。東京の警察の方が、なぜこの電車に乗っているんですか。この手配署には、都内でおこった事件は書かれていないようですが。管轄外じゃないんですか」
「それには事情があるんです。……ああ、これは今日発売の号ですね。ちょっと拝借」
刑事は承諾も得ずに、老夫の手から雑誌を取り上げた。そして、多摩川医師一家殺人の記事を開いてみせる。
「これこれ、これです。私はもともと、この事件の捜査を担当しているんですよ」
「本当ですか」
老夫が、驚いて目を瞠った。
「そうなんです。いやー、まったくひどい事件でして。私も長くこの仕事をやっていますが、これほど残忍な殺人はなかなかお目に掛からない。全身メッタ刺しで、現場は血みどろでした。本当に、遺族の方がお気の毒で」
「遺族がいるのですか？　記事には皆殺しと書いてありましたが」
「亡くなった奥さんのご両親が、千葉に住んでいるのです。二人とも、憔悴しきってしまってね。見ていられませんでした」
刑事は老夫に雑誌を返した。
「犯人の目星はついたのですか？」
「つきました。そこは簡単でした。記事にもあった通り、犯人の指紋が出たのです。それがつまり、この寺西の指紋だったのです」
「……ほう」
老夫は口をすぼめた。
「凶器の包丁は真之介君の遺体のそばに落ちていたのですが、そこにやつの指紋がバッチリ残っていました。照合結果が出たときには、われわれもさすがに色めき立ちましたよ。寺西は、いってみれば大物中の大物ですからね」
「彼は拳銃を使うのではないのですか」
「奴の拳銃は、前回の犯行で弾切れになっていたんです」
「しかし、凶器に指紋を残していくとは、大物のわりには抜けていますね」
「なんの。やつはこれまでの犯行でも、証拠隠滅などはした事がありません。今回も凶器だけではなく、そこいらじゅうにベタベタと指紋を残していきましたよ」
「なぜでしょう。手袋ひとつはめればすむことなのに」
「自棄になっているのです。これだけ大々的に手配されれば、開き直りもするでしょう。この先、もう何人殺そうが同じだことだと、悪度胸をすえてしまったに違いない。そういう意味では、きわめて危険な男です」
「寺西とかいう男のことは、もうわかりましたよ」マー君は疎ましげに話をさえぎって、「それでも、どうしてあなたがこの電車に乗っているのかという説明にはなっていないようですが」
「むろん、寺西を追っているのです。重大な手がかりがありましてね。これはマスコミには伏せてあるのですが」
「へえ」

「じつは、別荘の鍵がなくなっているんです。千鶴さんのご両親のお話では、孝道さんはこの先に、別荘を一軒もっているのだそうです。ところが、その鍵がなくなっている。ご両親が見たときには、建売り時のパンフレットといっしょに、豪華なケースに収められて保管してあったそうです。それがまるごとなくなっているんですね」

「それを、その寺西が盗んだというのですか」

「そうです」

「何のために」

「身を隠すためでしょう、もちろん」

「まさか。警察の手が回ることは、わかりきっているのに」

「数日くらいなら大丈夫と思ったのにちがいない。長いこと逃げ回って、追いつめられている男ですからね。たとえ一日だけでも、ベッドのうえでゆっくり眠りたいと考えて不思議はない。お金持ちの別荘なら、金目の物もたくさんあるだろうし」

「僕はもちろん、シロウトですが」マー君は、ポスターに目を落としたまま首をひねった。

「でも、わからないなあ。犯罪者には、手口というものがあるでしょう。拳銃強盗と、家に忍び込んで家族を皆殺しにするのとでは、ずいぶん犯罪の種類が違うように思いますが」

「そうとも言い切れません。この寺西は、今は追い詰められて行きずりの強盗を繰り返していますが、もともとはそういう男じゃない。インチキ商品を高額で売りつけたり、女や老人を騙して金を奪ったり、そういった手口が本来だったようです。ようするに、口先でまるめこんで他人の家にあがりこむのが得意な奴なんです。この記事にもあったと思いますが、被害者の大沢さん宅には、押し入った痕跡がまるでないんですね。きっと何かうまいことを言って、玄関を開けさせたのに違いありません」

そう言って、刑事は老夫とその妻を見やった。

「とにかく、女性やお年寄りに取り入るのが、うまい男なんです。びっくりするほど図々しい奴でしてね」

「なにか、古い知り合いみたいな口ぶりですね」

マー君は揶揄するように言った。刑事は険しい表情を変えず、

「殺害現場を見れば、誰だってそう思います。驚異的な、異常なまでの図々しさです」

「飯を食ったり、風呂に入ったりということですか」

「それだけじゃない。この雑誌の記事は、すこし間違っています。寺西は、テーブルに残された料理をそのまま食べたわけじゃないんですよ。彼は奥さんの千鶴さんを殺す前、わざわざ自分の好きな料理を作らせているんです」

マー君はあんぐりと口をあけた。

「そんな馬鹿な」

「確かです。犯行現場のダイニングテーブルには、中央に寄せ鍋が作ってあり、その他、筑前煮、だし巻き卵、ワカメと豆腐のみそ汁といった、和食が並んでいました。ところが三人の被害者の胃からは、この和食は見つかっていないのです。三人の胃からは、ステーキ、野菜の酒蒸し、冷製スープなどが内容物として発見されています。そしてそれらの食べ残しが、キッチンのゴミ箱に捨てられていました。また食べ残しには、孝道氏の血しぶきが付着していました。一方、テーブルにならんだ鍋料理と和食には、血しぶきはいっさいかかっていない。皿の下のテーブルクロスは真っ赤な血で染まっているのに、です」

「つまり、どういうことですか？」
「テーブルには最初、ステーキが並んでいた。真之介君をのぞいた三人が、それを食べていた。孝道氏が殺され、料理に彼の血がかかった。その料理はゴミ箱に捨てられ。そのあと、寄せ鍋や筑前煮があらためて作られ、テーブルに運ばれた。そういう順序になるわけです。殺された千鶴さんの顔は、涙ですっかり化粧が崩れていました。背中や腕からは、ひじょうに浅い切り傷が何本も見つかっています。これは、いわゆる防御創とも違う傷です。そしてエプロン姿だった。ここから想像するに、寺西は千鶴さんの背中に包丁をつきつけて、料理の作り直しを命じ、千鶴さんは恐怖に泣きじゃくりながらそれに従ったのだと思います。もっとも食べ残しを見る限り、料理の出来はあまりよくなかったようです。ご両親の話では、千鶴さんは和食は不得手で、ほとんど作ったことがないはずだ、ということでした。したがってこのメニューは、寺西が注文したものだと思われます」
　マー君は、まだ唖然としている。
「これから殺す相手にメシを作らせるなんて、信じられないなあ」
「だから、驚くべき図々しさだといったのです。逃亡生活で腹が減っていたのでしょう。作らせた料理は、掻き込むようにむさぼり食っている。もっとも千鶴さんは作りすぎていて、テーブルには器が六人分ならんでいました。寺西はそのうち、およそ四人分ほどを平らげています」
「六人分作ってあったのなら、犯人も六人いたんじゃありませんか」
「いや。鍋や皿や茶碗からは、千鶴さんの他は寺西ひとりの指紋しか検出されていません。食ったのが寺西ひとりであることは、確かです」
「ああ、なるほどね」
　マー君は面白くなさそうに相づちをうって、ぷいと横をむいた。
「長い逃亡生活ですからね。ようやく人心地がついた、という心境だったのだと思います。血まみれの死体なんか気にならなかったんですね。たっぷり食って、風呂につかって、ビールまであけている。記事にもある通り、常人では想像もできない神経の太さです」
「それはもう、わかりましたから」マー君はうんざりしたように顔をしかめ、「しかしですよ。彼の目的は強盗でしょう。居合わせた家の人間はやむをえず殺したとしても、残りの一人を殺すために、何時間も待ち伏せしたりしますか」
「待ち伏せというより、家の外へ出るに出られなかったのではないかと思います。おそらく、風呂に入ったりビールを飲んだりしているあいだに、バイクを乗り回した真之介君が、公園に戻ってきてしまったのでしょう。大沢家の玄関は、児童公園からよく見えるんですよ」
「記事には、犯人は長男が大柄だったことを事前に知っていた、と書いてありましたよ。そのために熱湯を用意していたと。寺西という男が、どうしてそんなことを知っていたんですか。まさか殺された人たちと顔見知りだったとでも？」
「いや、さすがにそれはないでしょう」
「じゃあ、どうして」
「家の中を物色している時に、真之介君の写真を見たのだと思います。それなら、公園で話している連中の中に真之介君がいることも、窓から顔を見ればわかる」
「だからって、二階でポットを抱えて、いつ帰ってくるかもわからない彼をじっと待って

いたりしますかね。だいいち、どうして寺西に、真之介が階段をのぼってくることが予想できるんです？」
「真之介君の部屋は二階にあるんですよ。室内を見れば、そこが若い男性の部屋だということはわかるはずだ。帰宅した彼が階段を上ってくることは、予測できたでしょう。ただ。真之介君が階段を上るより先に家族の死体に気がついてしまったら、どうするつもりだったのか、そこが疑問です」
「それは……」
マー君が口を滑らせかけると、刑事は思わず身を乗り出した。マー君はすんでのところで踏みとどまり、口をつぐんだ。
刑事は残念がる様子もなく、
「いや、失礼。真之介君以外の三人は、全員二階で殺されていたのでした。このことは雑誌には書いてありませんでしたが、大沢邸のキッチンと食堂は、二階にあったのです。だから、階段を上る前に、真之介君が事件に気がつくことはありえません」
「わかっていることを、どうして僕に訊くんです？」
「うっかりしていました。気を悪くされましたか」
「あたりまえでしょう」
「すみません。あなたの洞察力を、ちょっと試してみたくなったのです。寺西がポットを使ったことを、見事に見抜かれたのでね」
マー君は思わず、喉を鳴らして唾を飲み込んだ。
「ヤカンの熱湯じゃ、待っているあいだに冷めてしまう。だからポットを使ったんだろうと想像しただけです。おかしいですか」
「おかしくなんかない。感心しているんです。たしかにリビングにあったと思われる電気ポットが、二階の踊り場に、口を開けた状態で転がっていました。御説の通りです。まるで見てきたような名推理です」
マー君の心の奥底をのぞきこむように、刑事は大きく目を見開いた。顔をそむけたらさらに付け込まれるような気がして、マー君は正面からその視線を受け止める。
いつの間にか、言葉をかわしているのは彼ら二人だけになっていた。老夫婦の姿が遠くに霞み、マー君は、この刑事と密室に閉じ込められているような錯覚を覚えた。逃れようにも、刑事のヌメヌメとした物言いが、いやらしく絡みついて離れない。
「ところで、寺西は真之介君のタンスやクローゼットを、とくに入念に荒らしています。部屋中に服が散らかっていました。どうやら自分に合う服をさがしていたようです。寺西は身長が一八〇センチ。殺された真之介君も、ほぼ同じ背格好です。寺西はいま、まちがいなく真之介差の服を着ているはずです」
刑事は毛むくじゃらの手をのばし、手配書のポスターを返すようにうながした。マー君がわたすと、刑事はその中央を手の甲でパンとたたいて、
「黒いパーカーにジーンズという、ありふれた服なので最初は気がつかなかったのですが、真之介君の部屋に散乱していた衣装の中に、このふたつがまぎれこんでいたのです。これは寺西が脱いでいった物に違いない」
「パーカーとジーンズくらい、誰だって持っているでしょう」
「ところが、真之介君はお坊ちゃんだけあって、持っている服もすべて高級品でしてね。

ブランド物やらビンテージ物があふれかえっている中で、この二着だけがひどい安物だったのです。赤いスニーカーも同じです。玄関には何足かの靴が脱いであり、その中の一足が赤いスニーカーでしたが、これも安物でした。じつはこの靴底と同型のかすかな足跡が、家の中からいくつか発見されています。やつは土足であがりこんだのですね。床の血をなるべく踏まないように気をつけていたようですが、それでもいくつかの足跡は赤く染まっていて、靴底からも血液反応が出ました。この赤いスニーカーが寺西の遺留品であることはまちがいありません。したがって、やつは靴も履き替えています」

「そうですか。それなら、さっさと手配書を作りなおすんですね」

「残念ながら、どんな服に着替えたかがわからないんですよ。ただ、真之介君の友人に、彼のすべての服を見てもらったのですが、一着だけ、彼お気に入りの革ジャンパーがなくなっていることが、確認されました」

「ちょうどこんな感じのジャンパーだ、とおっしゃりたいんでしょうね」

マー君はふてくされたように、着ている革ジャンパーの襟をピンとひっぱった。

「あるいは、そうかもしれませんね」

刑事は否定もせず、真顔でうなずく。

精一杯の皮肉も不発に終わり、マー君はヤケ気味に声を張った。

「でも、いくら情報を書きなしても、肝心の顔がこんなのっぺらぼうの似顔絵じゃどうしようもないなあ。写真はなかったんですか」

「さあ、それが痛いところです。愛知県警の話では、寺西はもともと写真嫌いだったようで、交友関係をあたっても、やつの写真は一枚も出てこなかったらしい。中学の卒業アルバムの写真も、あまり現在の面影がないということで使い物にならなかった。似顔絵も作成してみたのですが、出来が悪くて採用を見送ったということでした。手配書というのは、諸刃の刃という面があります。誤った情報は、かえって正しい通報を遠ざけてしまう。……そういう意味では、このこめかみのイボの項は、削除しないといけない」

刑事が何かを誘いかけるように言ったが、マー君はもう乗らなかった。喋れば喋るほど相手の思うつぼに嵌まっていくことに、遅まきながら気がついたらしい。

それでも、今までのやりとりだけで刑事は充分満足そうだった。

「修正するより前に、こんな手配書は要らなくなるかもしれないな」

刑事はポスターを畳んで上着の内ポケットにおさめた。彼の慎重な手つきに、マー君は一瞬はっとして、それからギリギリと歯を噛んだ。

ポスターには当然、マー君の指紋がついている。

三

マー君の口数が少なくなった。かわりに、夫人を抱きよせる腕に、再び力がこめられる。まるで夫人との密着が、唯一の対抗手段であるかのように。

緊迫した空気は、夫人にも伝わっていた。やりとりの意味は理解できなくとも、刑事の快活な口調の裏に底意がひそんでいることは感じ取れる。その底意がマー君にとってよからぬ事であることも察しがついた。おろおろと落ち着きを失った彼女もまた、マー君を離すまいとするかのように、しっかりと彼の腕にしがみついている。

その時、それまで沈黙を守っていた老夫が声を発した。
「なるほど。刑事さんのお話をうかがっていわかりました」
「何がです？」
「おそらく、一家四人を殺したのは、その寺沢という男ではありませんよ」
マー君への助け船というよりは、妻の不安を和らげるための一言のようだった。
老夫の発言は唐突すぎた。場違いなほど呑気で、トンチンカンで、マー君をかばうその場しのぎにすらならないようであった。
にもかかわらず、態度は妙に落ち着きはらっている。声音の深さにも、聞き流すことを許さない説得力があった。取り合うにはおよばないと思いながらも、つい気になって刑事は尋ねてみた。
「それは、どういう意味ですか」
「言葉通りの意味です。あなたが指名手配の強盗を追っているのというのなら、何もいうことはありません。しかし、一家殺人事件の犯人を追っているのだとすれば、寺西にこだわるのは見当違いということになります」
刑事は苦笑をもらして何かを言いかけたが、老夫は手を上げてそれを制した。
「いや、わかっています。指紋が出た以上、寺西の犯行に疑う余地はないとおっしゃりたいのでしょう。しかし、それが問題です。私の考えるところ、この決定的な手がかりが、かえって他の細かい手がかりを霞ませてしまっているようです。ここはよくよく注意しなければいけません。真実は細部に宿るものですよ。嘘だと思うなら、もし現場から寺西の紋が発見されなかったら、と考えて、すべての手がかりを見直してご覧なさい。それでも、行きずりの強盗の犯行という結論になりますかな」
控えめではあるが、かなり断定的な異論であった。その口調は、学生の心得違いをただす教師に似ていた。このような言い方をされては、刑事も引き下がれない。
「では、聞かせていただきましょう。あなたが寺西の犯行ではないと考える、その理由は？」
「いくつかあります。たとえば遺留品の服です。真之介君の服の中にまぎれこんでいたという」
「おかしいですか。さっきも言ったように、奴は遺留品をのこすことなど恐れません。服をあれこれひっぱりだして、その場で着替えたのだとすれば、脱ぎ捨てた服が散らかした服にまぎれこむのは当たり前だと思いますが」
「まぎれこんだということは、はじめは誰もそれを寺西の服とは思わなかったということですね」
「そうです」
「つまり、パーカーとジーンズには、返り血はついていなかったということだと思うのですが、いかがです？」
刑事は言葉につまった。
「犯人は浴室で返り血を洗い流した痕跡があると、この雑誌の記事にもあります。伝えられているような殺害方法をとったとすれば、犯人が大量の返り血をあびるのは避けられないと、私も思う。しかし、寺西が着ていた服には血が付いていなかった。これは大変な矛盾だと思うのですが」

「寺西は血が付かないように自分の服を脱いでから、彼らを殺したのかもしれませんよ。はじめのうちは服を取り替えるつもりなどなく、殺したあとで思いついたのかも知れない」
「どうでしょう。寺西は忍び込んだのではなく、何らかの口実で被害者を騙して玄関を開けさせた、ということでした。すると彼は、家の中に通されたあと、彼らの前でおもむろに裸になり、それから犯行に及んだということになるのでしょうか」
「絶対にあり得ないとは言えないと思います」
「なるほど。では、バールについてはどうでしょう。寺西は、はじめてあがりこんだ家の中で、どうしてバールのある場所を知っていたのでしょうか」
「もちろん知らなかったでしょう。知っているはずがない。トイレのドアを破る道具をあちこち探して、たまたま見つけたのがバールだったのでしょう」
「バールは、もともとどこにあったのですか」
「階段の下が納戸になっていましてね。中に工具箱がありましたので、おそらくその中でしょう。決してみつけにくい場所じゃない」
「寺西が納戸をあさっているあいだ、娘さんはトイレに閉じこもっていたわけですね。その間、奥さんはどうしていたのでしょう。まさか片手で奥さんに包丁をつきつけながら、もう一方の手で納戸をあさっていたわけではありますまい」
「その時にはもう、奥さんは殺されていたんじゃありませんか」
「ということは、すでに料理は作らされたあとということですね。では奥さんが料理を作らされているあいだ、娘さんはずっとトイレに閉じこもっていたのでしょうか。六人分の食事を一から作るのに、何分かかりますか。その間、娘さんはトイレの窓から外にむかって叫び続けており、寺西はそれを放置しておいたと？」
「……では、娘に包丁をつきつけて脅すことで、奥さんに料理をさせたのではありませんか」
「しかし先ほどの話では、奥さんは背中や腕を切りつけられ、直に脅されるかたちで食事を作らされた、とおっしゃっていたようですが……」
「じゃあ反対に、脅された奥さんがバールの場所を喋ったのかもしれません」
「娘が殺されるとわかっているのに？」
　刑事はふたたび沈黙した。しょぼくれた老夫の淡々とした理詰めに、あれほど能弁だった刑事が次第に守勢に立たされていく。意外な展開に、マー君は固唾を飲んで二人の論戦を見守った。
「私はマー君の意見に賛成です。六人は多すぎるでしょうが、犯人は複数、二人以上いたと考えます。娘さんを追い詰めた犯人と、奥さんに料理を作らせた犯人とが別々だったと考えれば、何の不思議もありません」
「それなら、寺西に共犯者がいたのかもしれませんよ」
「しかしあなたご自身、本気でそう信じてはおられないでしょう」
　刑事は肩をすくめた。そんなおどけた動作も、劣勢をごまかす強がりのように見えた。
「料理についても、刑事さんのお話には、おやと思わせるところがあった。あなたは、腹を空かせた寺西が料理を掻き込むように平らげた、とおっしゃった。掻き込むように、です。食べる姿を見たわけでもないのに、どうしてそんなことがわかるのか、どうしてあなたがそのように想像されたのか、その理由を考えていたんです」

「それはただの、言葉の綾ですよ」
「いや、たとえ無意識にでも、掻き込むという表現を選択したからには、そう思わせる何かがあったはずだと思うのだが」
「それはだから、箸や茶碗に奴の指紋がついていたからです」
「それでは普通の食事と変わりません。それだけで『掻き込んだ』という光景は連想しない」
「茶碗だけじゃない。器や鍋にも、奴の指紋がついていたんです。鍋を抱え込んで食べ散らかすくらいだから、よほど腹が減っていて、掻き込んだのだろうと思ったんです」
「やはり、そうでしたか」
老夫が満足げにうなずくと、刑事はムッと顔色を曇らせた。
「何が、はやりなのですか」
「どんな腹を空かせた人間でも、できたての鍋料理を『掻き込む』ように食べることはできません。それでも寺西の指紋がついていたのなら、彼が食べた時、すくなくとも素手でつかめるていどに鍋は冷めていたということでしょう。つまり、料理が完成してから寺西が食べるまでのあいだに、かなりの時間が経過していたということになる」
「時間が経過していたら、どうだとおっしゃるんですか」
「おわかりのはずです。腹をすかせた男が主婦を脅して料理を作らせておきながら、鍋が冷え切るまで手をつけない。これは理屈に合いません。料理を作らせた犯人と、その料理を数時間後に食べた寺西とは別人だと考えるべきです。寺西は大沢邸に侵入した。しかし、その時にはもう殺人はおこなわれたあとだった」
刑事は口を開いて抗弁しかけたが、言葉が見つからなかったのか、萎むようにして黙り込んだ。
「私はこう考えます。真犯人たちは午後七時ごろ大沢家を訪問した。目的は、一家四人の皆殺しです。一家とは顔見知りだったでしょう。玄関から当たり前に家の中に招き入れられた犯人たちは、指紋や足跡は残さぬよう注意しながら、まずは主人と娘と奥さんを殺した。その後、不在の真之介が帰ってくるまで五時間、辛抱強く待った。やがて公園から彼の声が聞こえてくると、熱湯を準備して待機し、帰宅したところを不意をついて襲って殺す。それから遺体をシーツやカーテンで覆った。死体の、主に上半身をシーツなどで覆い隠す行為は、顔見知りによる犯行の特徴です。そうですね」
「……まあ、そうですね」
「一家四人はこのようにして殺され、犯人は浴室で返り血を洗い流し、用意した服に着替えて立ち去っていった。寺西がやってきたのは、そのあとでしょう。どうして彼が大沢邸に目をつけたのかはわからないが、あるいは立ち去った犯人らは、玄関のドアを開け放していったのかもしれない。だから寺西も、窓も破らず侵入することができたのでしょう。手配書によれば、寺西の最後の犯行は一週間も前、しかも現金強奪には失敗しています。金もなく、腹を空かせて、疲れ切っていたでしょう。そんな彼が、いかにも無防備な佇まいの邸宅をみつければ、誘い込まれるように侵入してもおかしくない」
老夫は静かに語り続ける。刑事は苦虫を噛みつぶしながら、辛抱して耳を傾けている。反対に、瀕死状態だったマー君は徐々に生気を取り戻していった。あれほど滑らかだった刑事の舌が、完全に動きを止めてしまった。その様が、愉快でならない。

「寺西が家の中に入った時には、もうすでに四人は殺されていた、というのが私の意見です。寺西もさぞかし驚いたでしょうが、もっけの幸いでもあった。テーブルの上の食事を見つけてまずは空腹を満たし、それから家の中をあさって金品を奪った。死体を覆ったシーツもすべてまくり上げ、指輪やアクセサリーまで奪い取った。風呂場で垢を落とし、真之介君の服を奪い、それに着替えて立ち去った。……ただ、どうして車を奪っていかなかったのかが謎ですが」

「その理由はわかっています。寺西は、運転免許を持っていません。持っていたこともありません。やつは運転ができないんですよ」

「ああ、なるほど」刑事の公平な補足を、老夫は頼もしげに受けとめた。「やはりあなた方だって、きちんと検討しておられる。バールや鍋の指紋のことだって、一度はお考えになったのではありませんか。すくなくとも、何か変だと頭をよぎるくらいのことはあったはずだ。ところが寺西の指紋という衝撃が、それらをすべて後方へ押しやってしまったのでしょう。マー君が言ったように、連続拳銃強盗と一家惨殺とでは犯罪の種類が違う。その点についても、とちゅうで考察をやめてしまった。矛盾する状況証拠をすべて軽視し、寺西が犯人だという前提を動かさぬよう、殺しの前に服を脱いだというような、無理やりな解釈を考え出す。これでは話があべこべです」

相手を必要以上に侮辱せぬよう気をつけながら、老夫は訥々と言葉をつむいでいく。智恵を誇るでもなく、それこそ教師が講義をおこなっているような、含蓄と年輪を感じさせる語り口だった。

「大物逮捕に、気持ちがはやるのはわかります。しかし、雑念や予断をとりのぞいて、冷静に手がかりを検討すれば、私と同じ結論になるはずです。寺西は現場にいた。しかし殺してはいなかった。それが真相だと思いますが、いかがでしょう。この寺西という男はまことに許しがたい、人道から外れた凶悪犯にちがいはありません。しかし、だからといって一家殺人の罪を彼に着せれば、彼とは別の凶悪犯が逮捕を免れることになってしまう。そこのところを、お考えになるべきです」

「……あなたはいったい、どういう方ですか」

刑事は、半ば呆れたようにたずねた。この老人は何者なのだろう。ひょっとして、かつて警察の現場にいた経験を持つ、事件捜査の先輩なのだろうか。

いやいや、とんでもない。老人は手を振って否定した。

「若い頃は司法解剖などに協力したこともありましたが、いまは引退したただの医者です」

「それに、マー君のパパよ」

忘れてもらっては困る、というように、夫人が口早に付け加えた。へこませた相手にダメを押す一言だった。最愛の息子に仇なす輩を、夫がギャフンと言わせたのだから、さぞかし痛快であるに違いない。

マー君はさらにご満悦だった。老夫の威を借りてすっかり優位に立ったつもりの彼は、どうだと言わんばかりに刑事を見下ろしている。

「どうです。パパの言う通り、寺西は犯人じゃないと納得できましたか」

刑事は口をへの字に結び、顔を紅潮させた。獲物を目前に訳のわからない二の足を踏まされ、そればかりかその獲物から愚弄される。体中の血が逆に流れるほどの屈辱だった。

しかし刑事はふっと息を抜き、すぐに平常心を取り戻した。そしてマー君にではなく、

老夫にむかって穏やかに言った。
「そこは、まあ、見解の相違ということにしておきましょう。物事は、いつも理屈通りとはかぎらない。殺人者が裸になったり、母親が娘を殺すバールを提供したり、そんなことだって、起こらなかったとは言い切れません。鍋の指紋だって、できたてを食べた数時間後にまた腹が減って、食べ残しをもういちど掻き込んだのかもしれませんよ」
「では、あくまで寺西にこだわるとおっしゃるので？」
老夫が残念そうに尋ねると、
「こだわります」
刑事は顎をひき、表情をひきしめて答えた。
「あなたは問題だとおっしゃるが、しかしやはり、いまは細かいことは後回しでよいのです。どちらにしろ、別荘の鍵を盗んだのは寺西にちがいない。とにかく奴を逮捕して、それからじっくり取り調べますよ。それがいま、私のするべきことです」
胸を張る刑事の姿は、堂々として見えた。むきになっているわけでも、自説に固執しているわけでもない。気負いのない、職業人としての矜持を感じさせる、凛とした確信の表明であった。
「……なるほど」
しばらくの間、老夫は黙って刑事の顔を見つめていた。彼の骨太な態度に、感じ入るところがあったらしい。やがて清々しい笑顔を向け、
「わかりました。どうやら出過ぎたことを申し上げたようです。すべて取り消しましょう。たいへん失礼いたしました」
老夫が慇懃にわびると、刑事はあわてて恐縮した。
「とんでもない。すこし耳が痛くはありましたが、御説は腑に落ちることばかりで、大変参考になりました。大沢家の窃盗事件はともかく、殺人事件につきましては、寺西以外の者の犯行という可能性を、一度しっかりと検討してみることにいたします」
刑事は頭を垂れ、虚心に感謝を表した。老夫も深く頷いて、笑顔で彼を激励した。
マー君は呆気にとられている。つい今しがた老夫の尻馬にのって刑事を嘲ったばかりなのに。ほんの数秒たっただけで、老夫と刑事は互いを認め合い、エールを交換し、握手までかわしそうな勢いだ。そればかりか、老夫はマー君潔白の論証をすべて撤回してしまった。まるでキツネにつままれたような気分だった。
車内に、ひび割れた車掌のアナウンスがひびいた。次の駅への到着を知らせる案内であった。
マー君は、夫人を抱いていた手をほどき、不意に立ち上がった。
「どうしました？」
マー君を見上げて、刑事が尋ねた。
「ここで降ります」
「えっ、どうして？」
夫人がすがるような眼差しを、マー君にむけた。
「ママ、ごめんよ。用を思い出したんだ」
「でも、さっきはわたしたちと行くって……傷の治療だってあるし……」
「およし」夫がそっと、妻の膝に手を置いた。夫はマー君に目を向けた。あいかわらず、

やさしい眼差しだった。「用があるならお行きなさい。私たちは止めないよ。でも、気が向いたら私どもを訪ねていらっしゃい。湖畔に立つ、赤い屋根の建物です。遠目にも、すぐわかるはずだ」

「すみません。ご親切に」

電車がホームに滑り込み、ドアが開いた。マー君は夫妻に頭を下げると、刑事には目もくれず、風のような速さで電車を降りていった。

同時に、刑事が尻をはたきながら立ち上がった。

「さて、それじゃあ私も降りるとするか」

「どうしました。別荘地はまだ先の駅ですよ」

「そう思っていたのですが、どうやら事情が変わったようなのでね」

「そうですか」老夫は、なごりおしそうに刑事を見送った。「では、くれぐれもお気をつけて」

刑事はホームに降りた。ベルが鳴りドアが閉まると、彼はふり返り、あらためて老夫婦を見た。

あれほどマー君にとりすがっていた夫人は、いまはもうそんなことは忘れてしまったかのように、虚ろな表情で窓の外をながめている。そんな妻の横顔を、夫は慈しみに満ちた眼差しで見守り、こめかみの後れ毛を梳いてやっていた。

あの男を強引に捕まえてもよかった。しかしなぜか、彼ら夫婦の前では、そういう気持ちが起きなかった。今この光景を見れば、この狭い車両の中で事を荒立てなかったことは、正しい判断だったと思える。

ひとつだけ、真犯人はなぜ、食べもしない料理を千鶴に作らせたのだろう。その点について、老夫の意見を聞いてみたかった。

電車はゆっくり走り出した。刑事も踵を返し、小走りにマー君のあとを追った。

四

刑事と別れたあと、夫妻は終点で駅を降り、別荘に到着した。

長く使っていなかった別荘は、すべての家具にほこりよけのシートがかぶせられていた。夫は居間のソファのシートを取りのけると、ちいさな体をその中に沈めた。たちまち、魂まで吐き出すかのような深いため息が、無意識にもれた。想像以上に疲労していたことに気がついて、老夫は鬱然とした気分になった。

夫人は、カーテンと窓を開け、すこしだけ部屋の空気を入れ換えた。しかし、すぐにまた窓を閉め切り、キッチンへとむかった。息子の見分けは付かなくとも、自分たちがここまで何をしにきたのか、自分が何をすればいいのかは、わかっている。

夫は持っていた鞄から、ちいさな写真たてを取り出してテーブルに置いた。それは成人式での写真らしく、着慣れないスーツを着た小柄な若者のうしろに、両親とおぼしき二人が晴れやかな表情で立っている。

老夫はテーブルのライターに手をのばし、ウォーミングアップのつもりで火をつけてみた。ところがオイルが切れているのか、石が減っているのか、ライターは火花もあげない。

何度も試みているうちに、玄関のチャイムが鳴った。

「いいよ、私が出る」
妻に声をかけ、玄関まで行ってドアをあけると、そこにはマー君が立っていた。
「すみません、やっぱり傷の治療が気になって……」
マー君は寒そうに首をすくめながら、人なつこい笑顔を浮かべた。
「やっぱり来たね」夫はにこりともせずに言った。「まあ、入りたまえ」
マー君は周囲に目を配り、誰にも見られていないことを確認してから中に入った。
靴を脱ぎ、框をあがりこんだ途端、マー君の挙措や表情から、いっさいの遠慮が消えた。彼は廊下をずがすか進み、案内された居間のソファに、この館の主のような態度でどっかと腰をおろした。
マー君はぐるりと首を回し、品定めするような視線で部屋の中を眺めた。柱時計、暖炉のうえの置物、骨董品とおぼしき壺のたぐい。クレジットカードと違い、金に換えても足はつきにくいはずだ。
「お茶を出したいところだが、火が使えなくてね。君を追っていった、あの刑事さんはどうしたのかね」
「さあね。三日くらいしたら、誰かに見つけてもらえるんじゃないかな」
マー君はニヤニヤ笑いながら、長い足を組んだ。その時、ズボンのベルトに拳銃が差し込んであるのが見えた。弾の切れた物とは別の、新しく仕入れたばかりの戦利品であろう。
「そうか」老夫は嘆息をもらした。「だから気をつけなさいと忠告したのに」
老夫はマー君の正面にすわり、ふたたびライターを手に取った。
まったく動じる気配のない老夫を、マー君はしばらく、不思議そうにながめていた。
「あんた、変わった人だな。俺が誰か、もうわかっているだろう」
寺西は腰からピストルを抜いた。それでも老夫は、眉ひとつ動かさない。
「あんたくらい年をとると、もう怖いという感情もわかないのか」
「そうかもしれないね」老夫はしみじみと言った。「何かを怖がるなんて瑞々しい気持ちは、ずいぶん前に忘れてしまったような気がするよ」
「金目の物はもらっていくよ。気の毒だけど、あんたたち二人には死んでもらう。たまたま一緒の電車に乗り合わせたのが不運だったな。俺としちゃ、あんたを殺るのはすこし気がひけるんだ。なにせ、俺が無実であることを信じてくれている、たったひとりの人だからな」
「本当に、とんだ濡れ衣だったね」
「まったくだ。家に押し入ったら、死体が四つも転がっていやがった。さすがの俺も面食らったよ」
「うっかり凶器に触ったりするから疑われるんだよ」
「まあ、はじめから死んでなきゃ、やっぱり俺が殺したかもしれない。同じことと言えば、同じことだ。だが、あの殺し方はひどかったなあ」寺西は、その時の光景を思い出して顔をゆがめた。「しつこいくらいグサグサ刺しやがって、いくらなんでもひどすぎる。カミさんなんか、腹から腸が出ていたんだぜ。あれを俺がやったことにされちゃ寝覚めが悪いと思っていたから、あんたの話は嬉しかったよ」
「君があの一家を殺していないということは、はじめからわかっていたんだよ」火花をあげないライターと格闘したまま、老夫はぽそりと言った。「やったのは、私たちだからね」

寺西は何も反応しなかった。聞き漏らしたわけではなかったが、意味がわからなかった。

「私たちと君が同じ電車に乗ったのは、偶然というわけじゃないんだよ。私が赤い屋根の建物と言ったものだから、君はそれだけを頼りにここへやって来たのだろう。住所を確かめなかったね。確かめていれば気がついたはずだ。ここはもともと君が目指していた別荘だ。大沢家の別荘なんだよ。私がマー君の生まれた年に購入した別荘だ」

そう言って、老夫はテーブルの写真たてに目をやった。

寺西は怪訝な顔で、その写真立てを手に取った。

次の瞬間、寺西は女のような悲鳴を上げた。成人式の記念写真に写っているのは、彼ら老夫婦と、若き日の大沢孝道に間違いなかった。

「孝道なのに『マー君』はおかしいと思うかね。マー君というのは漫画の主人公でね。息子は子供の頃その漫画が大好きで、自分のこともマー君と呼べと言ってきかなかった。マー君は優秀な子だった。立派な医者になってくれて私も鼻が高かった。困っている患者さんの立場に立って親身に治療をする、評判の名医だった。しかし二十年前に千鶴さんと結婚して、マー君は別人に変わってしまった」

夫はソファに端然と腰かけ、小首をかしげてライターに火をつけようとしている。表情も穏やかなままだったが、よく見ると、電車の中にいた時とは、すこし目の色が違うようだった。

「千鶴さんはマー君に、社会的地位を要求した。患者のことではなく、自分と自分の実家の親の面目を優先するよう、あの子を洗脳してしまった。以来、マー君は大学内での自分の出世のことしか考えなくなってしまった。私の忠告には耳もかさなくなった。みんな、千鶴さんのせいだ。千鶴さんは私と家内から、一人息子を奪い去ってしまった。千鶴さんは見栄ばかりの人だった。まともな子育てもしなかった。おかげで二人の孫も大馬鹿者になった。真之介は家内に暴力をふるって右目を失明させた。それ以来、家内はショックで気が狂ってしまった。早由利は人様の娘さんを自殺させておきながら、まったく反省の色を見せなかった。このイジメ事件がマスコミに騒がれたことで、マー君は大学を追われた。私も勤め先をやめさせられた。私は、みんなを殺して自分たちも死ぬことに決めた。犬まで殺すのは可愛そうだったが、早由利が寂しがると思ってね。千鶴さんには最後に、マー君の好きだった鍋料理の作り方を家内が教えてやった。そのためにわざわざ、食材を買っていったんだよ。家族六人で最後の団らんというわけにはいかなかったが、形だけでもと思ってね」

「まあ、マー君、やっぱり来てくれたのね」

居間の入り口に立った妻が、マー君を見つけて歓声を上げた。

「準備はすんだかい。こっちへおいで」

「お待ちになって」

妻はいったんキッチンへひっこみ、それから何かを持ってもどってきた。彼女は夫の隣によりそうように座った。

「我々はこれから、この別荘もろともマー君のあとを追うんだ。その前に捕まっては困るので、現場には指紋を残さないように気をつけていたんだが、まさかそのあとで君のような男が盗みに入るとは想定外だった。事件を早く発見させてやろうと、玄関ドアを開け放しておいたのが君の目をひいたんだね。まあいいさ。君をいっしょにつれて行くことで、

私たちもすこしは世の中の役にたてるだろう」
寺西は震える手で銃口を二人に向けた。
「どうぞ。撃ちたまえ。手間が省ける。ライターがつかなくて、弱っていたところだ。君は風邪をひいて鼻がきかないから気がつかなかったろう。家内はいま、家中のガス栓を開けてまわっていたんだよ」
愕然として寺西が引き金の指を離すと、力の抜けた彼の手から、老夫はやすやすと拳銃を取り上げた。
「あなた、またこのあいだみたいにしちゃダメ？　だって、あの時はとても楽しかったんですもの」
妻は恐ろしく澄んだ目を寺西に向けながら言った。その手に握られているのは、一本の包丁だった。
「好きなようにおし」老夫は妻の髪をやさしく撫でた。「かわりのライターは手に入った。でも、おまえのほうがすむまで待っていてあげるよ」
夫人が立ち上がった。小柄なはずの老婆の体が、寺西の目には巨人のようにおおきく見えた。高く包丁をふりあげながら微笑むその笑顔は、童女のようにあどけなかった。